

＜阿弥陀経＞における「八功德水」について

畝 部 俊 英

はじめに

鳩摩羅什訳『阿弥陀経』（以下『阿弥陀経』という。402年訳出⁽¹⁾）・「依報段」に次のような箇所がある。

又舍利弗、極楽国土、有七宝池。八功德水、充滿其中。池底純以金沙布地⁽²⁾。

（また舍利弗、極楽国土には、七宝の池あり。八功德水、その中に充滿せり。池の底にはもっぱら金沙をもって地に布けり。）

これは、極楽の七宝よりなる池には、「八功德水」が充滿していることを説いているのであるが、梵文『阿弥陀経』（*The Smaller Sukhāvati-vyūha*）には、

punar aparaṃ Śāriputra Sukhāvatyāṃ lokadhātau sapta-ratnamayyaḥ puṣkariṇyaḥ | tad yathā suvarṇasya rūpyasya vaiḍūryasya sphaṭikasya lohitaṃ muktasyāśmagarbhasya musāragalvasya saptamasya ratnasya | aṣṭāṅgopetavāriparipūrṇāḥ samatīrthikāḥ kākapeyāḥ suvarṇavālukāsaṃstṛtāḥ | ⁽³⁾

（また、次に、シャーリプトラよ、極楽世界には、七つの宝石からできている、もろもろの蓮池がある。[それらの蓮池は] すなわち金・銀・瑠璃・水晶・赤真珠・瑪瑙・第七の宝石である琥珀からできていて、八支をそなえた水（aṣṭāṅgopetavāri）によって満たされ、岸の高さと等

しく、烏が飲めるほどであり、金の砂が撒かれている。)とある。

『阿弥陀経』の文にしろ、この梵文にしろ、「八功德水」または「八支をそなえた水」とあるが、どんな「八功德水」であるのか、その八項目の内容については述べていない。そこで、ほとんどの『阿弥陀経』の解説では『阿弥陀経』の異訳である玄奘訳『称讃浄土仏摂受経』(以下『称讃浄土経』という。650年訳出⁽⁴⁾)の「八功德水」の文を引いて、その八項目の内容について述べるのが通例となっている。ただし、少し詳しい解説の場合には『俱舍論』の「八功德水」(本稿の18)の文を紹介しているものもある。『称讃浄土経』には次のようにある。

又舍利子、極楽世界浄仏土中、处处皆有七妙宝池。八功德水、弥満其中。何等名為八功德水。一者澄浄、二者清冷、三者甘美、四者輕軟、五者潤沢、六者安和、七者飲時除飢渴等無量過患、八者飲已定能長養諸根四大、増益種種殊勝善根。多福衆生常樂受用。是諸宝池底布金沙⁽⁵⁾。

(また舍利子、極楽世界浄仏土の中には、処々にみな七妙宝の池あり。八功德水、その中に弥満せり。なんらをか名づけて八功德水とする。一には澄浄、二には清冷、三には甘美、四には輕軟、五には潤沢、六には安和、七には飲む時飢渴等の無量の過患を除き、八には飲みおわって定んでよく諸根・四大を長養し、種々殊勝の善根を増益す。多福の衆生常に楽しみて受用す。このもろもろの宝池の底には金沙を布けり。)

ところで、『望月仏教大辞典』(以下『望月辞典』という)の「八功德水」の項⁽⁶⁾を見てみると、「須弥山の七内海等に盈満する功德水を云ふ」として『阿毘達磨大毘婆沙論』(以下『大毘婆沙論』という)巻第三百三三と『阿毘達磨俱舍論』(以下『俱舍論』という)巻第十一における「八功德水」の用例の文を引き、「又八功德水は諸仏の浄土等にも存する」として『阿閼仏国経』巻上・「善快品」、『阿弥陀経』、『弥勒大成仏経』、そして、『過去現在因果経』巻第一に「八功德水」という名称があることを挙げ、更に「八功德に関しては」として『成実論』巻第三・「四大仮名品」に「又仏説

く、八功德水は、軽、冷、軟、美、清浄、不臭、飲時調適、飲み已りて患なし」とある文、『俱舍論』巻第十一に、「甘 svādu、冷 śītala、軟 mṛdu、軽 laghu、清浄 accha、無臭 niḥ-pūtīgandhika、飲時に喉を損せず、na kaṇṭhaṃ kṣiṇoti、飲み已りて腹を傷らず pītaṃ na bādhate kuṇṣiṃ」とある文、そして『称讃浄土経』の文を掲出して、「此の中、前の二論は其の説同じ。称讃浄土経は無臭に代るに潤沢安和を以てするを異とす」とある。とすれば、『阿弥陀経』の「八功德水」の内容を解釈するのに、『阿弥陀経』の異訳であるという理由で『称讃浄土経』の「八功德水」の文をもってすることは、『俱舍論』や『成実論』が伝えている「八功德水」の内容ではなくて、「異とす」ところのある、すなわち異例の「八功德水」の解釈を用いていることになる。はたして『称讃浄土経』の「八功德水」は、『望月辞典』が指摘しているほど異例の「八功德水」であるのか、他にも類例があるのか、以下においてそれを検討してみたい。

『阿弥陀経』における「八功德水」は「蓮池」の功德水である。ニカーヤ・阿含の經典には、その「蓮池」の「水」について、「河」の「水」についての場合もあるが、「八功德水」として纏められる前段階の定型表現と見られる文がある。またアビダルマ論書には、『望月辞典』の「八功德水」の項にあるように、七内海の「八功德水」について述べているものがある。『大毘婆沙論』、『俱舍論』、『阿毘達磨藏顯宗論』（以下『顯宗論』という）、更に『阿毘達磨順正理論』（以下『順正理論』という）である。そして大乘の經典では、『望月辞典』が挙げている『阿閼佉国経』や『阿弥陀経』などのように、「八味水」または「八功德水」という名称のみを挙げているもの、「八功德水」の八項目に言及するいくつかのものがある。また梵文『八千頌般若経』（*Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā*）の「八支をそなえた水」について、ハリバドラ（Haribhadra）は梵文『八千頌般若経釈』（*Abhisamayālaṃkāṛālokā Prajñāpāramitāvyaḥkāṣā*）において、その八項目を挙げている。従って、「八功德水」の八項目に言及している、主なる文を経・論・釈より取り出してみれば、『称讃浄土経』の

「八功德水」が異例であるのか、あるいはそうでないのか、分かるであろう。そこで、ニカーヤ・阿含の經典における、「八功德水」として纏められる前段階の定型表現と見られる文、さらに「八功德水」という名称のみがある文から、まず見ていくことにする。

1

ニカーヤ・阿含の經典

- (1) 『相應部』(*Samyutta-Nikāya*)・「有偈品」(*Sagātha-vagga*)・Ⅲ
「コーサラ相應」(*Kosala-Samyutta*)

Seyyathāpi Mahārāja gāmassa vā nigamassa vā avidūre pokkharaṇī acchodakā sītodakā sātodakā setakā supatitthā ramaṇiyā.⁽⁷⁾

(大王よ、たとえば村あるいは都邑から遠くないところに清浄な(accha)水を有する、冷たい(sīta)水を有する、爽快な水を有する、透明な、岸がよく作られている、楽しい蓮池(pokkharāṇī)があるとしよう。)

以下において、その主なるものを見ていくのであるが、ニカーヤ・阿含の經典には、「蓮池」または「河」の水について、このように述べている文がいくつかある。恐らく「八功德水」として纏められる前段階の定型表現と思われる。これらの文には、「八功德水」に見られる“accha”とか、あるいは“sītala”に近い“sīta”という語がある。次にこのパーリ文に対して、漢訳經典である『別訳雜阿含經』と『雜阿含經』に、相應する箇所があるのでそれらを見てみよう。

- (2) 失訳『別訳雜阿含經』卷第三・59(351-431年訳出⁽⁸⁾)

譬如近城村邑聚落有清冷池、流出好水、四辺平正、多饒林樹⁽⁹⁾。

(たとえば近くの城の村邑・聚落に清冷の池あり、よき水を流出し、四辺は平正にして、多饒の林樹あるがごとし。)

この文では「清冷池」とか「好水」とか、簡潔に訳されていて、パーリ

文の対応箇所と対照しなければ、「八功德水」として纏められる前段階の定型表現とは見られないかもしれない。

(3) 宝雲・法勇訳『雑阿含經』卷第四十六・1232 (443年までに訳出⁽¹⁰⁾)
譬如大王聚落城郭辺有池、水澄淨、清涼、樹林蔭覆、令人受樂、多衆受用、乃至禽獸⁽¹¹⁾。

(たとえば大王、聚落・城郭の辺りに池あり、水は澄淨、清涼にして、樹林蔭覆し、人をして受樂せしめ、多衆受用して、乃ち禽獸にまで至らんがごとし。)

この『雑阿含經』の文には、「水澄淨、清涼」とある。なお、「樹林蔭覆」については、後で取り上げる『増支部』(*Aṅguttara-Nikāya*)の(8)の文において「いろいろな樹々によって覆われている」(*nānārukkehi sañchannā*)とある表現に近いように思われる。

(4) 『長部』(*Dīgha-Nikāya*)・16『大般涅槃經』(*Mahāparinibbāna-suttanta*、以下パーリ文『涅槃經』という)

Ayaṃ bhante Kakutthā nadī avidūre acchodikā sātodikā sītodikā setakā supatitthā ramaṇiyā.⁽¹²⁾

(尊者よ、遠くないところに清浄な水を有する、爽快な水を有する、冷たい水を有する、透明な、岸がよく作られている、楽しい、かのカクッター河があります。)

「河」についても、このように「清浄な水を有する、…、冷たい水を有する」とある。この箇所は『遊行經』では、次のように訳されている。

(5) 竺仏念訳『長阿含經』卷第三・2『遊行經』(413年訳出⁽¹³⁾)

今拘孫河去此遠。清冷可飲、亦可澡浴⁽¹⁴⁾。

(いま、拘孫河はここを去ること遠からず。清冷にして飲むべく、また澡浴すべし。)

なお、『遊行經』には、この文に続いて「時鬼神、居在雪山。篤信仏道、即以鉢盛八種浄水、奉上世尊」⁽¹⁵⁾(ときに鬼神あって、雪山に居在す。篤く仏道を信じ、すなわち鉢をもって八種の浄水を盛りて、世尊に奉上せ

り)とある。この箇所は、パーリ文『涅槃經』と梵文『大般涅槃經』においては対応する文がなく、前後の文との続き方が不自然であるが、ここに「八功德水」のことと解釈されている⁽¹⁶⁾「八種浄水」という語が見られる。さらに、法顕訳⁽¹⁷⁾(?)『大般涅槃經』巻中(以下三卷本『涅槃經』という)にも「七重城外、各有湏水、其水澄潔、具八功德」⁽¹⁸⁾(七重之城の外に、おのおの湏水あり。その水は澄潔にして、八功德を具す)とあって、転輪聖王・大善見の都城の外にある湏水について「具八功德」という表現が見られる。また、その法殿を述べる描写の中にも「又造宝池。其水清潔、具八功德」⁽¹⁹⁾(また宝池を造る。その水は清潔にして、八功德を具す)という箇所がある。この三卷本『涅槃經』については法顕の訳出であることが疑われていて⁽²⁰⁾、訳出年を明らかにすることができない。

(6) パーリ文『涅槃經』

atha kho sā nadikā cakkacchinnā parittā lulitā āvilā sandamānā āyasmante Ānande upasaṃkamante acchā vipprasannā anāvilā sandittā.⁽²¹⁾

(さてその河は、車輪に分断され、[水量が]少なく、攪乱され、濁って流れていたが、具寿アーナンダが近づくと、清浄で(acchā)、澄み(vipprasannā)、濁らず(anāvilā)流れていた。)

これは(4)のカクッター河ではなく、別の小川のことである。この箇所における「清浄で、澄み、濁らず」とある中の「濁らず」は、後で取り上げる闍那崛多訳『起世経』(597-604年訳出⁽²²⁾)に「其水涼冷、味甘、輕美、清浄、不濁」⁽²³⁾とあり、達磨笈多訳『起世因本经』(605-617年訳出⁽²⁴⁾)に「其水涼冷、味甘、軟美、清浄、不濁」⁽²⁵⁾とあって、その中の「不濁」と同じように見えるが、この二つの經典を含む<世記经>類には対応するパーリ文・梵文・チベット語訳の原典が現存しないので、「不濁」の原語が何であるかを確認することができない。

(7) 『中部』(Majjhima-Nikāya)・12『師子吼大经』(Mahāsīhanāda-suttaṃ)

Seyyathā pi Sāriputta pokkharāṇi acchodakā sātodakā sitodakā setakā sūpatitthā ramaṇiyā, avidūre c' assā tibbo vanasaṇḍo, …⁽²⁶⁾

(サーリプッタよ、たとえば清浄な水を有する、爽快な水を有する、冷たい水を有する、透明な、岸がよく作られている、楽しい蓮池があり、また、その遠くないところに鬱蒼たる密林があるとしよう。…)

ここにも、蓮池について「清浄な水を有する、…、冷たい水を有する」という表現が用いられている。

(8) 『増支部』(Āṅguttara-Nikāya)・V-17「嫌恨品」(Āghāta-vagga)

Seyyathā pi āvuso pokkharāṇi acchodakā sātodakā sitodakā setodakā supatitthā ramaṇiyā nānārukkhehi sañchannā, …⁽²⁷⁾

(友よ、たとえば清浄な水を有する、爽快な水を有する、冷たい水を有する、透明な水を有する、岸がよく作られている、楽しい、いろいろな樹々によって覆われている蓮池があるとしよう。…)

少し異なるところもあるが、ここにも「蓮池」の定型的な表現が用いられている。また、「いろいろな樹々によって覆われている」という箇所は、既に述べておいたように、(3)『雑阿含経』における「樹林蔭覆」という表現が近いように思われる。このパーリ『増支部』経典には、次のような『中阿含経』が対応し、相応箇所もある。

(9) 『中阿含経』卷第五・25『水喻経』(398年訳出⁽²⁸⁾)

諸賢、猶村外不遠有好池、水既清且美、其淵平満、翠草被岸、華樹四周⁽²⁹⁾。

(諸賢、なお村外遠からずしてよき池あり、水もとより清く且つ美、その淵平満にして、翠草岸を被い、華樹四周するがごとし。)

ここでは、水は「清且美」と表されている。上の(8)における「いろいろな樹々によって覆われている」の対応箇所は「華樹四周」のようである。

以上を通観してみても言えることは、『長阿含経』所収の『遊行経』に「八種浄水」、三卷本『涅槃経』に「具八功德」という語が見出されるが、

『遊行經』の文については、前後の文との繋がりが不自然であり、三卷本『涅槃經』は、既に述べたように、法顯訳であることが疑われ、訳出年が確認出来ない。とすれば、この両經は別にして、これまでに取り上げてきたニカーヤ・阿含の經典においては「八功德水」という名称も、その八項目の内容について言及している文もなく、「八功德水」として纏められる前段階の定型表現と見られる文が、「蓮池」や「河」の水の描写の中でしばしば用いられているということである。

ところで、『長阿含經』の第四分は『世記經』が収められている。この点について、本来の＜長阿含經＞は第三分までであり、第四分は後世の付加であると見られている⁽³⁰⁾。この經がその内容から見て、「後にアビダルマ論書において増広・発展していく仏教宇宙論への橋渡しともいうべき位置にある」⁽³¹⁾ からである。この『世記經』および一群の＜世記經＞類の經典には、「八功德水」として纏められる前段階の定型表現と見られる文は勿論のこと、「八功德水」という名称も出てくる。そこで、次に＜世記經＞類の經典を見ていくことにする。

2

＜世記經＞類の經典

(10) 法炬訳『大樓炭經』(291-312年訳出⁽³²⁾)

上有水、名阿那*達。…其底沙皆金。其水涼冷、軟美且清⁽³³⁾。

*宋本、元本、明本では那+(鉢)とある。

(上に水あり、阿那達と名づく。…その底の沙はみな金なり。その水は涼冷、軟美且つ清なり。)

＜世記經＞類の中で最古訳の『大樓炭經』では、「八功德水」として纏められる前段階の定型表現と思われる文が数か所にあるが、ここでは、その一例を挙げてみる。阿那達という池の水は「涼冷、軟美且清」とある。『阿弥陀經』に「池底純以金沙布地」(梵文では「金の砂が撒かれている」)

とあるところが、「其底沙皆金」とある。

(11) 竺仏念訳『長阿含経』卷第十八・(30)『世記経』(413年訳出)

其山頂上有阿耨達池。…。其水清冷、澄淨*、無穢。…。阿耨達池底金沙充滿⁽³⁴⁾。

*宋本、元本、明本では淨は清とある。

(その山の頂上に阿耨達池あり。…。その水は清冷、澄淨にして、無穢なり。…。阿耨達池の底には金沙充滿す。)

閻浮提洲の阿耨達池の水について、「清涼、澄淨、無穢」とある。やはり同じような表現が数か所にある。その一つには「其水清冷、無有塵穢。…。又其池底金沙布散」⁽³⁵⁾ というような単純な表現もある。それが『長阿含経』の訳出より約200年後の訳出である『起世経』では次のように表されている。

(12) 闍那崛多訳『起世経』卷第一(597-604年訳出)

於山頂上有池、名曰阿耨達多。…。其水涼冷、味甘、輕美、清淨、不濁⁽³⁶⁾。

(山の頂上において池あり、名づけて阿耨達多という。…。その水は涼冷、味甘く、輕美、清淨にして、不濁なり。)

阿耨達多池の水であるが、「其水涼冷、味甘、輕美、清淨、不濁」と増広している。なお、この中の「不濁」については、次に取り上げる『起世因本経』と共に(6)パーリ文『涅槃経』のところで言及した。

(13) 達摩笈多訳『起世因本経』卷第一・「鬱多羅究留洲品」(605-617年訳出)

其池名曰阿耨達多。…。其水清涼、甜美、輕軟、香潔、不濁⁽³⁷⁾。

(その池、名づけて阿耨達多という。…。その水は清涼、甜美、輕軟、香潔にして、不濁なり。)

『起世経』と『起世因本経』の訳はほとんど同じであるが、「八功德水」として纏められる前段階と見られる定型表現においては、このように少し違う訳語で表されているところもある。また、＜世記経＞類における「八

功德水」という名称は、『起世経』では閻浮に注ぐ雨について「其水甘美、具八功德」⁽³⁸⁾（その水は甘美にして、八功德を具す）とあり、『起世因本経』では鬱多羅究留洲と諸山海に「雨八功德水」⁽³⁹⁾（八功德水を雨ふらす）とある中に見られる。

「八功德水」の名称は玄奘訳『大毘婆沙論』卷第三百十三（659年訳出⁽⁴⁰⁾）にも「七金山間有七内海。八功德水、盈満其中」⁽⁴¹⁾（七（七は八か、一筆者）金山のあいだに七内海あり。八功德水、その中に盈満す）とある。その七内海の「八功德水」の内容については、アビダルマ論書には次のようにある。

3

アビダルマ (Abhidharma) 論書

(14) 鳩摩羅什訳『成実論』卷第三・「四大仮名品」(412年訳出⁽⁴²⁾)

又仏説、八功德水、軽、冷、軟、美、清浄、不臭、飲時調適、飲已無患⁽⁴³⁾。

（また仏説く、八功德水とは、軽、冷、軟、美、清浄、不臭、飲む時調適、飲みおわって患なしと。）

『成実論』では「仏説」として「八功德水」の内容を、このように挙げている。

(15) 梵文『俱舍論』(Abhidharma-kośabhāṣya)・「第三処」(trītiyaṃ kośasthānaṃ)

eṣāṃ ca Nimindharāntānāṃ parvatānāṃ saptāntarāṇi sapta śītā ucyante pūrṇā aṣṭāṅgopetasya pāṇiyasya | taddhi pāṇiyaṃ śītaḥ ca svādu ca laghu ca mṛdu cācchaṃ ca niṣpratikaṃ ca pibataśca kaṇṭhaṃ na kṣiṇoti pītaṃ ca kukṣiṃ na vyābādhate |⁽⁴⁴⁾

〔スメール山を初めとして〕ニミングラ〔山〕を限りとする、それら〔八〕山の七つのあいだは七海と呼ばれ、八支をそなえた水(pāṇiya)で満たされている。すなわち、その水は冷たさ(śītaḥ)と、甘美さ

(svādu) と、軽さ (laghu) と、軟らかさ (mr̥du) と、清浄さ (acchaṃ) とがあり、臭わず (niṣpratikaṃ)、飲む時喉を損せず (飲時不損喉、pibataśca kaṇṭhaṃ na kṣiṇoti)、そして飲みおわって腹を傷めず、(飲已不傷腹、pītaṃ ca kuṇṣiṃ na vyābādhati)。

「(八支をそなえた) 水」の梵語は、梵文『阿弥陀経』では“vāri”という語で表されているが、『俱舍論』では“pāṇiya”という語、また、次に掲げるヤシヨミトラの『俱舍論疏』では“jala”という語になっている。

- (16) ヤシヨミトラ造・梵文『俱舍論疏』(*Abhidharmakośavyākhyā*)・
「世間の説示と名づける第三俱舍処」(loka-nirdeśo nāma tṛtīyaṃ kośa-sthānaṃ)

aṣṭāṃgopetasyeti.

śīta'āccha-laghu-svādu-mr̥du-niḥpūṭigaṃdhikaṃ

pītaṃ na bādhati kuṇṣiṃ na kaṇṭhaṃ kṣiṇoti taj jalam

iti aṣṭāṃga-saṃgraha-ślokaḥ.⁽⁴⁵⁾

「(八支をそなえた [水] で」という [ことについて]、

かの水 (jala) は冷たさ (śīta)・清浄さ (accha)・軽さ (laghu)・

甘美さ (svādu)・軟らかさ (mr̥du) があって、悪臭がなく (niḥ-

pūṭigaṃdhikaṃ 飲みおわって腹を痛めず、[飲む時] 喉を損せず。

という八支を撰する偈がある。)

梵文『俱舍論』の「八支をそなえた水」の中に“niṣpratikaṃ”という語が挙げられている。(14) 鳩摩羅什訳『成実論』と、以下で取り上げる (18) 玄奘訳『俱舍論』とに見える「不臭」という語がこれに当たるのではないかと推定したのであるが、この『俱舍論疏』では“niḥpūṭigaṃdhikaṃ” (腐敗の臭がない、悪臭がない) とある。次に漢訳の『俱舍釈論』と『俱舍論』を挙げておく。

- (17) 真谛訳『俱舍釈論』卷第八 (561 年訳出⁽⁴⁶⁾)

於彼中間有七海。遍滿八功德水。此水冷、美、輕、軟、清、香、飲時不咽逆、於喉飲已利益内界、不損於腹⁽⁴⁷⁾。

(かの間において七海あり。八功德水を遍満す。この水は冷、美、軽、軟、清して、香りあり、飲む時咽逆せず、喉において飲みおわって内界を利益し、腹を損せず。)

『成実論』と『俱舎論』においては「不臭」とあるのが、『俱舎釈論』では「香」とある。

(18) 玄奘訳『俱舎論』卷第十一 (654 年訳出⁽⁴⁸⁾)

中間八海。前七名内。七中皆具八功德水。一甘、二冷、三軟、四軽、五清浄、六不臭、七飲時不損喉、八飲已不傷腹⁽⁴⁹⁾。

(中間に八海あり。前の七を内と名づく。七の中にみな八功德水を具す。一には甘、二には冷、三には軟、四には軽、五には清浄、六には不臭、七には飲む時喉を損せず、八には飲みおわって腹を傷めず。)

以上、アビダルマ論書としては『成実論』、梵文の『俱舎論』と『俱舎論疏』、漢訳の『俱舎釈論』と『俱舎論』における「八功德水」を見てきたが、その内容はすべて同じである。また、『顕宗論』⁽⁵⁰⁾と『順正理論』⁽⁵¹⁾における「八功德水」の八項目の内容および訳文はともに『俱舎論』と同じである。

なお、大乘経典を取り上げる前に、律蔵の一例を見ておこう。

(19) 義浄訳『根本説一切有部毘奈耶』卷第十 (702 年、あるいは 703 年訳出⁽⁵²⁾)

如仏所説、無熱大池所有諸水具八功德。所謂冷、美、軽、軟、清浄、香潔、飲不損喉、入腹無患⁽⁵³⁾。

(仏の所説のごとくならば、無熱大池のあらゆる諸水は八功德を具す。いわゆる冷、美、軽、軟、清浄、香潔、飲むに喉を損せず、腹に入るに患なし。)

この一例では「八功德水」の八つの内容は、アビダルマ論書と同じである。

大乘の經典

支婁迦讖訳『阿閼佉国經』(147-189年訳年⁽⁵⁴⁾)に「其浴池中、有八味水」⁽⁵⁵⁾(その浴池の中には、八味水あり)とある。この「八味水」について、『阿閼佉国經』の異訳である『不動如来会』(『大宝積經』所収、713年訳出⁽⁵⁶⁾)の相応箇所に照らして、「八功德水」のことであると見られている⁽⁵⁷⁾。とすれば、「八味水」という名称だけであるが、恐らく漢訳の大乗經典における最も古い用例ということなる。その内容が挙げられている大乘經典で、訳出者と訳出年がはっきりしている經典となると訳出年代は新しくなる。

②① 曇無讖訳『大方等無想經』⁽⁵⁸⁾(以下『無想經』)卷第二

諸河盈満八功德水。所謂美、冷、輕、軟、清淨、香潔、飲時調適、飲已無患⁽⁵⁹⁾。

(諸河八功德水を盈満す。所謂美、冷、輕、軟、清淨、香潔、飲む時調適、飲みおわって患なし。)

これは八項目の順序は異なるが、内容も訳文も①④『成実論』と同じである。曇無讖はこの部分に関して『成実論』の訳文を参照して訳出したとすれば、『無想經』は『成実論』訳出年の412年以後の訳出ということにある。ただし『成実論』では「不臭」とあるのが、ここには、「香潔」とある。この「香潔」という語は、頻度は多くないが、「八功德水」の八項目の中に見出される場合がある。②⑥ハリバドラ造・梵文『八千頌般若經』において“su-gandhi”(よい香り)とあるものが、これに当たると考えられる。

②① 瞿曇般若流支訳『正法念処經』卷第六十九(550年訳出⁽⁶⁰⁾)

一切河流八功德水。何等為八。一者具味、二者清淨、三者香潔、四者除渴、五者涼冷、六者飲之無厭、七者無垢、八者飲之無患、無惡魚過⁽⁶¹⁾。

(一切の河流に八功德水あり。なんらを八となす。一には味を具え、二には清浄、三には香潔、四には渴を除き、五には涼冷、六にはこれを飲むに厭くことなく、七には垢なく、八にはこれを飲むに患なく、悪魚の過なし。)

「悪魚の過」というのは魚の骨が刺さって、喉を傷めることとすれば、「悪魚の過なし」とは『俱舍論』の「不損喉」(喉を損せず)に当たるのであろうか。

(22) 玄奘訳『菩薩藏会』(『大宝積経』卷第三十七、645年訳出⁽⁶²⁾)

其処自然八功德水出現於地。所謂一輕、二冷、三軟、四澄静、五無穢、六清浄、七樂飲、八多飲無患⁽⁶³⁾。

(その処に自然に八功德水は地に出現す。いわゆる一には輕、二には冷、三には軟、四には澄静、五には無穢、六には清浄、七には楽しんで飲み、八には多く飲むも、患なし。)

『菩薩藏会』は玄奘訳とされているが、「澄静」とか「樂飲」などという訳語が見られる。

(23) 不空訳『大乘瑜伽金剛性海曼殊室利千臂千鉢大教王経』(以下『千臂千鉢大教王経』という。740年訳出⁽⁶⁴⁾)

時自然有八功德水。…。何者為八。一者心得快樂、如入禪定。二者輕安。三者軟滑。四者澄虚性淨。五者無諸穢濁。六者清瑩淨徹。七者常飲安善。八者多飲無患、消除煩惱、得常樂清浄、則是如來聖力甚希、奇特之法⁽⁶⁵⁾。(ときに自然に八功德水あり、何をか八となすや。一には心に快樂を得、禪定に入るがごとし。二には輕安なり。三には軟滑なり。四には澄虚性淨なり。五にはもろもろの穢濁なし。六には清瑩淨徹なり。七には常に飲むに安善なり。八には多く飲むも患なく、煩惱を消除し、常に樂清浄を得れば、すなわちこれ如來の聖力はなほだ希にして、奇特の法なればなり。)

この「八功德水」は「一者心得快樂」、「四者澄虚性淨」、「六者清瑩淨徹」、あるいは「七者常飲安善」とあって、これまで見てきた「八功德水」と見

比べてみると異例の内容のように見えるが、例えば「澄虚清浄」は「澄浄」の意を、「清瑩浄徹」は「清浄」の意を拡張したものとするれば、それは訳出上の問題であって、特に異例のものとは思われない。

㉔ 法護等奉詔訳『大乘菩薩藏正法經』巻第九⁽⁶⁶⁾

自然涌出八功德水。所謂一冷、二輕、三軟、四香、五美、六清、七飲時無厭、八多飲無患⁽⁶⁷⁾。

(自然に八功德水を涌出す。いわゆる一には冷、二には軽、三には軟、四には香り、五には美、六には清、七には飲む時厭なく、八には多く飲むも患なし。)

この経典においては「八功德水」の文は簡潔に訳されている。

㉕ 日称等訳『父子合集經』⁽⁶⁸⁾

八功德水悉海盈満。所謂輕、清、甘、滑、不濁、不臭、飲者無厭、令腹無痛⁽⁶⁹⁾。

(八功德水はことごとく海に盈満す。いわゆる軽、清、甘、滑、不濁、不臭、飲む者に厭なく、腹をして痛みなからしむ。)

この経典においても「八功德水」の内容は簡潔に訳されている。㉔と㉕とを対照してみると、㉔の「軟」、「香」、「美」は㉕では「滑」、「不臭」、「甘」と訳されていることが分かる。

梵文『八千頌般若經』に出てくる「八支をそなえた水」(aṣṭāṅgopeta-pāṇiya)⁽⁷⁰⁾に関して、梵文『八千頌般若釈』においてハリバドラは八支の内容を挙げている偈文を出しているので、大乘経典を取り上げた最後にそれを紹介しておこう。

㉖ ハリバドラ造・梵文『八千頌般若釈』

aṣṭāṅgopeta-pāṇiyaṃ su-gandhi svādu śītaḥ
laghv acchaṃ śuci pātuś ca kuṅṣi-kaṇṭhau na bādhate |⁽⁷¹⁾

(八支をそなえた水 (pāṇiya) は、よい香り (su-gandhi)、甘美さ (svādu)、冷たさ (śītaḥ)、軽さ (laghu)、清浄さ (accha)、純粹さ (śuci) があり、飲む者の腹と喉とを痛めないのである。)

この梵文『八千頌般若釈』と(15)梵文『俱舎論』の「八支をそなえた水」とを対照にしてみると、「よい香り」(su-gandhi)が「不臭」(niṣpratika, (16) ヤショミトラ造・梵文『俱舎論疏』では niḥpūṭigaṃdhika)とあるが、意味は同じことであろう。(17)『俱舎釈論』にも「香」、また(20)『無想経』にも「香潔」とあることは既に見てきた。しかし、「純粹さ」(śuci)は梵文『俱舎論』では「柔らかさ」(mṛdhu)とある。

5

中国の経疏・論疏

さて、中国で漢訳された主な仏典については諸師によって講義が行われ、経疏・論疏としてまとめられ、伝えられている。『大正新脩大蔵経』(以下『大正蔵』という)の「経疏部」(33～39巻)と「論疏部」(40～44巻)には、その代表的な経疏・論疏が収められている。それらの著述の中には著者が疑われているもの、著された年代が明確でないものなどの問題があるが、その問題には今は立ち入らないで、ただ本稿で取り上げている「八功德水」の八項目の内容についてのみ、それらの著述がどのような仏典に基づいて取り上げているのかということを見ていくこととする。

(27) 宝亮(444-509)等集『大般涅槃経集解』巻第二(509年撰述⁽⁷²⁾)

道慧記曰、八功德水者謂輕、冷、軟、美、清浄、不臭、飲時調適、飲已無患也⁽⁷³⁾。

(道慧の記に曰く、八功德水とは輕、冷、軟、美、清浄、不臭、飲む時調適、飲みおわって患なきを謂うなりと。)

これは(14)鳩摩羅什訳『成実論』の「八功德水」に基づくものである。

(28) 慧遠(523-592)述『大般涅槃経義記』巻第一

八功德水之所成者清浄、不臭、輕、冷、軟、美、飲時調適、飲已無患⁽⁷⁴⁾。

(八功德水の所成とは清浄、不臭、輕、冷、軟、美、飲む時調適、飲みおわって患なしと。)

これも少し順序が違うが、『成実論』によるものであろう。

(29) 慧遠撰『無量寿經義疏』卷下

二明水相。具八功德。清、不臭、輕、冷、濡、美、飲時調適、飲已無患⁽⁷⁵⁾。

(二に水相を明かす。八功德を具す。清、不臭、輕、冷、濡、美、飲む時調適、飲みおわって患なし。)

(30) 慧遠撰『觀無量寿經義疏』本

八功德水者清淨、不臭、輕、冷、濡、美、飲時調適、飲已無患⁽⁷⁶⁾。

(八功德水とは清淨、不臭、輕、冷、濡、美、飲む時調適、飲みおわって患なし。)

「八功德水」の八項目の内容について、『無量寿經義疏』も『觀無量寿經義疏』も「軟」が「濡」になっていること、順序が異なっていること、『無量寿經義疏』では「清淨」が「清」になっていることなどが『成実論』と異なるが、全体的にみれば『成実論』系である。さて、次に後人が天台大師智顗に仮託して著したとされている二書を見てみたい。

(31) 天台智者大師説 (?)『觀無量寿仏經疏』

八功德水者輕、清、冷、軟、美、不臭、飲時調適、飲已無患⁽⁷⁷⁾。

(八功德水とは輕、清、冷、軟、美、不臭、飲む時調適、飲みおわって患なし。)

(32) 天台智者大師記 (?)『阿弥陀經義記』

八功德水充滿盈溢、輕、清、冷、軟、美、而不臭、飲時調適、飲已無患⁽⁷⁸⁾。

(八功德水は充滿盈溢し、輕、清、冷、軟、美、しかして不臭、飲む時調適、飲みおわって患なし。)

二書共に順序は異なるが、『成実論』の「八功德水」の内容と同じである。

(33) 善導 (613-681) 集記『觀無量寿仏經疏』卷第三

此水即有八種之德。一者清淨潤沢。…。二者不臭。…。三者輕。四者冷。

五者軟。…。六者美。…。七者飲時調適。八者飲已無患⁽⁷⁹⁾。

(この水すなわち八種の徳あり。一には清浄・潤沢。…。二には不臭。…。三には軽。四には冷。五には軟。…。六には美。…。七には飲む時調適。八には飲みおわって患なし。)

ここに「八種之徳」として挙げられているものも、順序は異なるが、『成実論』の「八功德水」と同じである。但し、『成実論』には、「一者清浄」とあるところが、「一者清浄・潤沢」とあって「潤沢」が加えられている。この「潤沢」という語は、玄奘訳『称讃浄土経』の「八功德水」の中で「五者潤沢」とあるのに、文字においては一致する。偶然の一致か、それとも善導は『称讃浄土経』を見て加えたのか、わずかに「潤沢」の二文字ではあるが、「善導と玄奘との関係を知る手がかりはまったくない」と言われている現状に鑑みて、両者が繋がっていると見ることはできないであろうか⁽⁸⁰⁾。

さて、次に玄奘門下の著述を見てみよう。

(34) 普光述『俱舎論記』巻第十一

若依称讃浄土経、数八功德水云、一者澄浄、二者清浄、三者甘美、四者軽爽、五者潤沢、六者安和、七者飲時除飢渴等無量過患、八者飲已定能長養諸根・四大、増益種種殊勝善根⁽⁸¹⁾。

(もし『称讃浄土経』によれば、八功德水を数えていわく、一には澄浄、二には清浄、三には甘美、四には軽爽、五には潤沢、六者には安和、七には飲む時飢渴等の無量の過患を除き、八には飲みおわって定んでよく諸根・四大を長養し、種々殊勝の善根を増益すと。)

『称讃浄土経』には「清冷」、「軽軟」とあるのが、ここには「清浄」、「軽爽」とある。それ以外は同じである。本稿で既に取り上げた (18) 玄奘訳『俱舎論』巻第十一 (654 年訳出) に「八功德水」の内容は出てくるのであるが、ここでは普光は『称讃浄土経』の「八功德水」を用いている。

(35) 円暉述『俱舎論頌疏論本』巻第十一

七中皆具八功德水。一甘、二冷、三爽、四軽、五清浄、六不臭、七飲時

不損喉、八飲已不傷腹⁽⁸²⁾。

（七の中にみな八功德水を具す。一には甘、二には冷、三には喫、四には軽、五には清浄、六には不臭、七には飲む時喉を損せず、八には飲みおわって腹を傷めず。）

これは全文とも既に取り上げた (18) 玄奘訳『俱舍論』卷第十一の「八功德水」の引用である。この書は、普光の『俱舍論記』によって著されていて、『俱舍論』訳出年の永徽五年（654）以後の著述である。

(36) 大慈恩寺基（632-682）撰『観弥勒上生兜率天経贊』卷下

八功德水者一清、二軽、三冷、四濡、五香、六美、七飲時不損喉、八飲已不傷腹⁽⁸³⁾。

（八功德水とは一には清、二には軽、三には冷、四には濡。五には香り、六には美、七には飲む時喉を損せず、八には飲みおわって腹を傷めず。）

順序が異なるのと、「軟」が「濡」とあるが、「一清」から「六美」までは、(17) 真谛訳『俱舍論』の訳語であり、「七飲時不損喉、八飲已不傷腹」は (18) 玄奘訳『俱舍論』の「八功德水」の訳語である。

(37) 基撰『瑜伽師地論略纂』卷第一

八徳水者一甘、二冷、三軟、四軽、五清浄、六不臭、七飲時不損喉、八飲已不傷腸⁽⁸⁴⁾。

（八徳水とは一には甘、二には冷、三には軟、四には軽、五には清浄、六には不臭、七には飲む時喉を損せず、八には飲みおわって腸を傷めず。）

これは、「八」の「腹」が「腸」とあるが、それ以外は、『俱舍論』と同じである。次に取り上げる二書は後人の著とされているものである。

(38) 基法師撰（？）『阿弥陀経疏』

称讃浄土経云、一澄浄、二清冷、三甘美、四軽軟、五潤沢、六安和、七飲時除飢渴等、八飲已長養諸根四大⁽⁸⁵⁾。

（『称讃浄土経』に云く、一には澄浄、二には清冷、三には甘美、四には軽軟、五には潤沢、六には安和、七には飲む時飢渴等を除き、八には飲

みおわって諸根・四大を長養す。)

(39) 窺基撰(?)『阿弥陀経通賛疏』巻中

八徳者一澄浄、二清冷、三甘美、四輕軟、五潤沢、六安和、七飲時除飢渴、八飲已長養諸根⁽⁸⁶⁾。

(八徳とは一には澄浄、二には清冷、三には甘美、四には輕軟、五には潤沢、六には安和、七には飲む時飢渴を除き、八には飲みおわって諸根を長養す。)

この(38)と(39)の二疏は、『称讃浄土経』の八功德水の「七」と「八」とを少し省略して出している。

(40) 法蔵(643-712)述『華嚴経探玄記』巻第十九(695年述)

八功德水者一輕、二冷、三軟、四美、五浄、六不臭、七飲時調適、八飲已無患⁽⁸⁷⁾。

(八功德水とは一には輕、二には冷、三には軟、四には美、五には浄、六には不臭、七には飲む時調適、八には飲みおわって患なし。)

『成実論』では「清浄」とあり、ここには「浄」とあるが、『成実論』と順序も内容も全く同じである。

(41) 慧沼(650-714)撰『金光明最勝王経疏』巻第四本

五得八解脱、…、或八種智、現八功德水。一浄、二輕、三冷、四喫、五甘、六不臭、七飲不損喉、八飲不傷腸⁽⁸⁸⁾。

(五に八解脱、…、あるいは八種の智を得れば、八功德水を現す。一には浄、二には輕、三には冷、四には喫、五には甘、六には不臭、七には飲むとき喉を損せず、八には飲んで腸を傷めず。)

この「八功德水」は『俱舍論』系である。

(42) 法崇(705-774)述『仏頂尊勝陀羅尼経教跡義記』巻下

云何名八功德水。一者輕、二清、三濡、四冷、五香、六美、七飲時不損喉、八者腹不成病⁽⁸⁹⁾。

(いかに八功德水と名づく。一には輕、二には清、三には濡、四には冷、五には香り、六には美、七には飲む時喉を損せず、八には腹は病と

ならず。)

順序は異なるが、前半の「六」までは『俱舍論』系であり、「七」は『俱舍論』であり、「八」は意を取って表してあるのであろうか。

(43) 澄観(738-839)撰『大方広仏華嚴経疏』巻第五十七(787年撰)

八功德水者謂輕、冷、濡、美、淨、而不臭、調適、無患⁽⁹⁰⁾。

(八功德水とは輕、冷、濡、美、淨、しかして不臭、調適、患なきを謂う。)

これは『成実論』の「八功德水」を簡潔に表したものと見られる。

(44) 智円(976-1022)述『阿弥陀経疏』(1021年述)

八功德水者称讚浄土経云、一澄清、二清冷、三甘美、四輕軟、五潤沢、六安和、七飲時除飢渴、八飲已長養諸根⁽⁹¹⁾。

(八功德水とは『称讚浄土経』に云う、一には澄清、二には清冷、三には甘美、四には輕軟、五には潤沢、六には安和、七には飲時除飢渴、八には飲みおわって諸根を長養すと。)

これまでに見てきた (38) 基法師撰(?)『阿弥陀経疏』、(39) 窺基撰(?)『阿弥陀経通賛疏』、この智円述『阿弥陀経疏』、そして (46) として後で見る 蕩益智旭解『阿弥陀経要解』においても、「八功德水」の八項目は『称讚浄土経』から引かれている。引かれている理由は、『称讚浄土経』が『阿弥陀経』の異訳であるということであろう。日本の注釈類でも同じ理由で、『阿弥陀経』に「八功德水」の八項目の内容は主に『称讚浄土経』から引かれている。

(45) 元照(1048-1116)述『観無量寿仏経義疏』巻中

八功德一輕、二清、三冷、四軟、五美、六不臭、七飲時調適、八飲已無患⁽⁹²⁾。

(八功德は一には輕、二には清、三には冷、四には軟、五には美、六には不臭、七には飲む時調適、八には飲むおわって患なし。)

これは順序は異なっているが、『成実論』の「八功德水」である。

(46) 蕩益智旭(1599-1655)解『阿弥陀経要解』(1647年解)

八功德者一澄浄、二清冷、三甘美、四輕軟、五潤沢、六安和、七除饑渴、八長養諸根也⁽⁹³⁾。

(八功德とは一には澄浄、二には清冷、三には甘美、四には輕軟、五には潤沢、六には安和、七には饑渴を除き、八には諸根を長養するなり。)

「七」と「八」は省略して表してあるが、前に述べたように、これはほぼ『称讃浄土経』の「八功德水」の文である。

以上、中国の経疏・論疏に引用されている「八功德水」の八項目がどのような仏典に基づいているのか、⑦から④の20例を取り上げ、見てきた。

引用されている仏典の割合は、

『成実論』(412年訳出)……………10例

『俱舍釈論』(561年訳出)……………1例 (『俱舍釈論』の八項目の前半部分を引用しているものが2つあるので、それを足して1例と数える)

『称讃浄土経』(650年訳出)……………5例 (この中、玄奘門下の撰述が3例)

『俱舍論』(654年訳出)……………4例 (この中、玄奘門下の撰述が3例、八項目の後半部分を引用しているものが2つあるので、それを足して1例と数える)

である。

この20例で見るかぎり、中国の主な経疏・論疏において、漢訳仏典の「八功德水」の八項目が引用されている頻度は、『成実論』の10例というのが最も高い。『成実論』は現存の漢訳仏典の中で「八功德水」の八項目の具体的内容を最初に明示した文献であり、鳩摩羅什の訳出ということもあって、中国の諸師が引用するのに信頼度という点でも高かったからであろうか。また『称讃浄土経』の5例を除いて、他の15例がすべてアビダ

ルマ論書における「八功德水」の解説からの引用であることも注目させられる。

おわりに

以上、検討してきたことを整理してみると、次のようになる。

- (1) 『成実論』、『俱舍論』、『顯宗論』そして『順正理論』に取り上げられている「七内海」に充滿している「八功德水」として具体的な内容が述べられているように、その八項目は説一切有部や経量部などの、北方のアビダルマ教学において纏められたものと思われる。
- (2) 現存のニカーヤや阿含經の經典において見られるような、「蓮池」や「河」の水の定型表現の中にある“accha”（清浄な）、あるいは“sita”（冷たい）を取り入れ、または参考にして、八項目は構成されたものである。
- (3) 『遊行經』に「八種浄水」、三卷本『涅槃經』に「八功德」とあるのは、アビダルマ教学で纏められた八項目を表す「八功德水」という名称が、既に成立していたこれらの經典の中に、後のある時期に加えられたのであろう。
- (4) アビダルマ的な經典の＜世記經＞類である、『起世經』と『起世因本經』には、例えば「其水涼冷、味甘、輕美、清浄、不濁」というような、八項目は揃っていないけれども、「八功德水」に近い定型表現が見られる。また、この二つの經典にも「八功德水」という名称が見られる。
- (5) 大乘仏典には、『阿閼佉国經』の「八味水」などを含めて、「八功德水」という名称だけが出てくるものは、他にも多くある。
- (6) 漢訳仏典では、「八功德水」の八項目が見られるのは、『成実論』、『無想經』、『正法念処經』、『俱舍釈論』、『菩薩藏会』（『大宝積經』所収）、『称讃浄土經』、『顯宗論』、『順正理論』、『俱舍論』、『根本説一切

有部毘奈耶』、『千臂千鉢大教王經』、『大乘菩薩藏正法經』、『父子合集經』である。これらの仏典における八項目を対照してみると、『称讃浄土經』の八項目の中の「五者潤沢、六者安和」というのは、『望月辞典』が述べているように確かに異例のものである。

- (7) 『阿弥陀經』の「八功德水」の具体的な内容は、『阿弥陀經』の異訳ということもあって、従来『称讃浄土經』の八項目が主に引用され、解説にも用いられてきたのであるが、定型表現としては『成実論』や『俱舍論』などの八項目が本来的なものであったと思われる。

註

- (1) 『阿弥陀經』の訳出者と訳出年については、僧祐撰『出三藏記集』（以下『出三』という）巻二の「鳩摩羅什」の項に「無量寿經一卷或云阿弥陀經」（『大正新脩大藏經』（以下『大正藏』という）55巻、11頁、上段）とあり、費長房撰『歷代三宝紀』（以下『三宝紀』という）巻八の「鳩摩羅什」の項に「弘始四年（402）」（『大正藏』49巻、78頁、上段）とある。このことについて、藤田宏達『原始浄土思想の研究』（岩波書店、1970年、第1刷）108頁参照。
- (2) 『大正藏』12巻、346頁、下段—347頁、上段。
- (3) *The Smaller Sukhāvativyūha*, Emended text of F. Max Müller's edition by K. Fujita (以下 *Sm. Sukh.* という。藤田宏達『阿弥陀經講究』、真宗大谷派宗務所出版部、2001年、裏80頁、11—15行)。
- (4) 『称讃浄土經』の訳出者と訳出年については、智昇撰『開元釈教録』（以下『開元録』という）巻八の「玄奘」の項に「称讃浄土仏摂受經一卷」として「永徽元年（650）…訳」（『大正藏』55巻、555頁、下段）とある。
- (5) 『大正藏』12巻、348頁、下段。
- (6) 『望月辞典』第5巻（世界聖典刊行協会、1970年、第6版）4206頁。
- (7) *The Saṃyutta-Nikāya of the Sutta-piṭaka*, Part I, Sagātha-vagga, ed. by M. Léon Feer, PTS., London, Repr. 1960, p. 91, ll. 5-7.
- (8) 『別訳雑阿含經』については、法経等撰『衆經目錄』巻三において、いくつかの失訳經の中に「別訳雑阿含經二十卷」（『大正藏』55巻、130頁、中段）を掲げ、『開元録』巻十三においても失訳經として挙げて、「必是三秦代」（351-431）

- 訳」（『大正蔵』55巻、610頁、下段）と述べている。水野弘元『『別訳雑阿含經』について』（水野弘元著作選集第一巻『仏教文献研究』、春秋社、1996年、348頁）参照。
- (9) 『大正蔵』2巻、394頁、上段。
- (10) 『雑阿含經』の訳出年については、『出三』巻二の「求那跋陀羅」の項「雜（麗本では新）阿鉢經五十卷（宋、元、明の三本では「卷」以下に「宋元嘉中（424-453）於瓦官寺訳出」（『大正蔵』55巻、12頁、下段）とある。靖邁撰『古今訳経図紀』巻三の「求那跋陀羅」の項には「以宋文帝元嘉十二年（435）來至揚都。…至元嘉二十年（443）…訳雑阿含經五十卷・衆事分阿毘曇十二卷…総七十八部合一百六十一卷。…弟子法勇伝語」（『大正蔵』55巻、362頁、中一下段）とある。そこで、訳出年について、椎尾博士は「世紀443訳出と見て大過なきこと、思はれる」（椎尾弁匡「新訂雑阿含經解題」（『国訳一切經』阿含部一、大東出版社、1970年、重版、66頁、中一下段）と述べ、水野博士も「五十卷『雑阿含』の訳出（443）」（水野弘元『『別訳雑阿含經』について』（水野、前掲書、348頁）と見ている。訳出者については、『出三』巻二の「求那跋陀羅」の項においては「天竺摩訶乘法師求那跋陀羅、…宣出諸經、沙門釈宝雲及弟子菩提法勇伝訳」（『大正蔵』55巻、13頁、上段）とあるから、実際の訳出者は『雑阿含經』の場合は宝雲・法勇であったであろう。
- (11) 『大正蔵』2巻、337頁、中段。
- (12) *The Dīgha-Nikāya*（以下 *DN.* という）、Vol. II., ed T. W. Rhys Davids and J. Estlin Carpenter, PTS., Repr., 1966, pp. 128, l. 28-129, l. 1.
- (13) 『長阿含經』の訳出者と訳出年については、『出三』巻九所収の僧肇作「長阿含經序」に「（弘始）十五年（413）…、出此長阿含訖。涼洲沙門仏念為訳」（『大正蔵』55巻、63頁、下段）とある。また、『出三』巻二の『仏駄耶舎』の項に「長阿含經二十二卷」とあり、割註に「秦弘始十五年出。竺仏念伝訳」（『大正蔵』55巻、11頁、中段）とある。
- (14) 『大正蔵』1巻、19頁、下段。
- (15) 同上。
- (16) 三枝充恵・森章司・菅野博史・金子芳夫校註『長阿含經』I（新国訳大蔵經、阿含部1、大蔵出版、1993年）161頁、冠註。
- (17) 『開元録』巻三の「釈法顕」の項において、智昇は「文似顯訳」という理由で「大般涅槃經三卷」を掲出している。
- (18) 『大正蔵』1巻、201頁、上段。
- (19) 同上、201頁、下段。
- (20) 中村元『遊行經』上＜阿含一＞（『仏典講座』1、大蔵出版、1984年）20頁参

照。

- (21) DN. Vol. II, p. 129, ll. 20-22.
- (22) 『起世経』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻七の「闍那崛多」の項に「起世経十卷」とあり、割註に「第五訳。… 崛多・笈多二法師共出（宋本、元本、明本の三本によれば出は訳とある。）」（『大正蔵』55巻、549頁、上段）とある。「597（年）」については、「或は開皇十七年（597）以後に」とある小野玄妙『仏書解説大辞典』別巻・仏典総論（大東出版社、改訂発行、1978年、137頁、上段）による。「604年」については、道宣撰『大唐内典録』（以下『内典録』という）巻五の「達摩崛多」の項に「仁寿之末（604）〔闍那〕崛多… 流擯東越」（『大正蔵』55巻、280頁、上段）による。
- (23) 『大正蔵』1巻、312頁、下段。
- (24) 『起世因本経』の訳出者と訳出年については、『内典録』では「達摩崛多」の項に「東都起世経十卷」（『大正蔵』55巻、280頁、上段）とあり、『開元録』では「起世因本経十卷」（『大正蔵』55巻、551頁、下段）とあり、この經典は「從大業初年（605）、終大業末歳（617）。訳大方等善住意等經九部、…」（『大正蔵』55巻、552頁、中段）の中に入っている。
- (25) 『大正蔵』1巻、367頁、下段。
- (26) *The Majjhima-Nikāya*, Vol. I, ed. by V. Trenckner, London, PTS., Repr. 1964 p. 76, ll. 27-29.
- (27) *The Āṅguttara-Nikāya*, Part III, ed. by E. Hardy, London, PTS., Repr. 1976, p. 190, ll. 5-7.
- (28) 『中阿含経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻九所収の道慈「中阿含（含は麗本には鎔とあるが、宋本、元本、明本の三本による。以下同じ）経序」に「然後乃以普隆安元年…、更出此中阿含。… 請僧伽提和、軋胡為普。… 至來二年（398）…、草本始訖」（『大正蔵』55巻、64頁、上段）とある。この「経序」は麗本（すなわち『大正蔵』）所収の『中阿含経』末尾に少し省略もあるが、「後出中阿含経記」（『大正蔵』1巻、809頁、中一下段）として出ている。また、『出三』巻二の「僧伽提婆」の項に「中阿含経六十卷」とあり、その割註に「普隆安元年…、於東亭寺訳出。至二年（398）… 訖」（『大正蔵』55巻、10頁、下段）とある。
- (29) 『大正蔵』1巻、454頁、下段。
- (30) 前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』（山喜房仏書林、1964年、第1刷）620頁、およびその「註（4）」635頁参照。
- (31) 小山一行「解題」（『新国訳大蔵経』阿含部3、『長阿含経Ⅲ 他』（大蔵出版、1995年、4頁）。

- (32) 『大樓炭經』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「法炬・法立」の項において、四部の中に「樓炭經六卷」とあり、「右四部、凡十二卷。晋惠懷（＋帝）宋本、元本、明本の三本）時（291-312）、沙門法炬訳出」（『大正藏』55巻、9頁、下段）とある。
- (33) 『大正藏』1巻、278頁、下段。
- (34) 同上、116頁、下段。
- (35) 同上、117頁、上一中段。
- (36) 同上、312頁、下段。
- (37) 同上、369頁、下段。
- (38) 同上、320頁、上段。
- (39) 同上、370頁、上段。
- (40) 『阿毘達磨大毘婆沙論』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻八の「玄奘」の項に「阿毘達磨大毘婆沙論二百卷」とあり、割註に「顯慶元年七月二十七日…訳、至四年（659）七月三日畢」（『大正藏』55巻、557頁、上段）とある。
- (41) 『大正藏』27巻、691頁、下段。
- (42) 『成実論』の訳出者と訳出年については、『出三』巻第十一所収の『成実論記』によれば、「大秦弘始十三年…、尚書令姚顗請出此論、至来年（412）九月十五日訖。外国法師拘摩羅婆、手執胡本、口自伝訳」（『大正藏』55巻、78頁、上段）とある。
- (43) 『大正藏』32巻、261頁、中一下段。
- (44) *Abhidharma-kosabhāṣya of Vasubandhu*, ed. by P. Pradhan, Tibetan Sanskrit Works Series Vol. VIII, K. P. Jayaswal Research Institute, Patna, 1967, p. 160, ll. 13-15.
- (45) *Sphuṭārthā Abhidharmakośavyākhyā*, the Work of Yaśomitra, ed. by U. Wogihara, The Publishing Association of Abhidharmakośavyākhyā, Sankibo Buddhist Book Store, Tokyo, 1936, 1971, 1989, p. 325, ll. 8-11.
- (46) 『俱舍釈論』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻七の「真諦」の項に「阿毘達磨俱舍釈論二十二卷」とあり、割註に「天嘉四年正月二十五日於制旨寺出。…至光大元年（561）十二月二十五日訖」（『大正藏』55巻、545頁、下段）とある。
- (47) 『大正藏』29巻、214頁、下段。
- (48) 『俱舍論』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻八の「玄奘」の項に「阿毘達磨俱舍論三十卷」とあり、割註に「永徽二年五月十日於大慈恩寺翻經院訳。至五年（654）七月二十七日畢」（『大正藏』55巻、557頁、上段）とある。
- (49) 『大正藏』29巻、57頁、下段。

- 50) 同上、850 頁、中段。
- 51) 同上、515 頁、中段。
- 52) 『根本説一切有部毘奈耶』の訳出者と訳出年については、円照撰『貞元新定釈教目録』巻十三の「義浄」の項に「根本説一切有部毘奈耶五十巻」とあり、割註に「長安二年（702）十月四日於西明寺訳」（『大正蔵』55 巻、868 頁、中段）とあるが、『開元録』巻九の「義浄」の項には、「根本一切有部毘奈耶五十巻」とあり、割註に「長安三年（703）十月四日於西明寺訳」（『大正蔵』55 巻、567 頁、下段—568 頁、上段）とある。
- 53) 『大正蔵』23 巻、680 頁、上段。
- 54) 『阿閼仏国経』の訳出者と訳出年については、『出三』巻二の「支識（支婁迦識）」の項に「阿閼仏国経一卷」とあり、その他の訳出経典と共に「漢桓帝・靈帝時（147-189）…所訳出」（『大正蔵』55 巻、6 頁、中段）とある。
- 55) 『大正蔵』11 巻、755 頁、下段。なお、『阿閼仏国経』においては、「八味水」についての記述は他の箇所（756 頁、上段）にも出てくる。
- 56) 『不動如来会』の訳出者と訳出年については、『開元録』巻九の「菩提流志」の項に「大宝積経一百二十巻」とあり、割註に「神龍二年（706）創首、先天二年（713）功畢」（『大正蔵』55 巻、569 頁、中段）とある。
- 57) 椎尾弁匡・蓮沢成純訳『阿閼仏国経』巻上の脚註【111】に「八味の水、異訳に八功德水とあり」（『国訳一切経』宝積部七、大東出版社、1972 年改訂、138 頁）。
- 58) 『無想経』の訳出者については、『出三』巻二の「曇摩識（曇無識）」の項に「方等大雲経四巻」とあり、割註に「或云、方等無想大雲経」（『大正蔵』55 巻、11 頁、中段）とあるのによる。そして、「曇無識の訳経年代で正確に言えるのは『大涅槃経』と『優婆塞戒経』だけであり、他の経典の訳出年時は不明である」（鎌田茂雄『中国仏教史』第三巻、東京大学出版会、1984 年、45 頁）とあるように、訳出年については『無想経』も明らかではないが、本稿の方で述べておいたように、「八功德水」の訳語のほとんどが『成実論』と同じであるので、その訳語を取り入れたものと見て、『成実論』訳出の 412 年以後、そんなに速くない年代の訳出と見ておく。
- 59) 『大正蔵』12 巻、1084 頁、下段。
- 60) 『正法念処経』の訳出者と訳出年については、「正法念処経叙」に「瞿曇流支（瞿曇般若流支）・比丘曇林・僧昉等、…。乃訳明茲典、名正法念処、起自興和歳陽玄黙（539）、終于武定淵獻之季（550）」（『大正蔵』17 巻、1 頁、中段）とある。
- 61) 『大正蔵』17 巻、408 頁、上一中段。

- (62) 『菩薩藏会』の訳出者と訳出年については、『内典録』巻五の「玄奘」の項に「大菩薩藏經」とあり、割注に「貞觀十九年（645）、在弘福寺訳」（『大正藏』55巻、282頁、中段）とある、『開元録』巻八の「玄奘」の項（『大正藏』55巻、555頁、下段）においても同じ。
- (63) 『大正藏』11巻、213頁、中段。
- (64) 『千臂千鉢大教王經』の訳出者と訳出年については、この經の最初にある「序」において「後至開元二十八年（740）…、至五月五日、奉詔訳經。…、三藏演梵本、慧超筆授。…、後到十二月十五日、翻訳將訖」（『大正藏』20巻、724頁、中段）とある。
- (65) 『大正藏』20巻、728頁、上段。
- (66) 『大乘菩薩藏正法經』の訳出年に関しては、成尋『參天台五台山記』第七の熙寧六年（1073）三月廿六日の項に「慶歷年中（1041-1048）進」（大日本仏教全書『遊方伝叢書』第三、467頁、上段）とあるのが参考となる。
- (67) 『大正藏』11巻、799頁、下段。
- (68) 『參天台五台山記』第六の熙寧六年（1073）二月廿七日の項に『父子合集經』について「拝見父子合集二卷了。…、雖廿五卷訳出、第三以下末清書進覽。因之、不能拝見」（『遊方伝叢書』第三、447頁、下段）とある。
- (69) 『大正藏』11巻、973頁、中段。
- (70) *Abhisamayālaṃkāra' āloka Prajñāpāramitāvyākhyā, the Work of Haribhadra*, ed. by U. Wogihara, Tokyo, Sankibo Buddhist Book Store, 1932, 1973, p. 741, l. 7, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, with Haribhadra's Commentary Called Āloka*, ed. by P. L. Vaidya, Buddhist Sanskrit Texts-No. 4, Darbhanga, 1960, p. 179, l. 21.
- (71) *Abhisamayālaṃkāra' āloka Prajñāpāramitāvyākhyā, Work of Haribhadra*, p. 742, ll. 11-12, *Aṣṭasāhasrikā Prajñāpāramitā, with Haribhadra's Commentary Called Āloka*, p. 494, ll. 28-29.
- (72) ⑦以下④⑥までの著者の生存年は、鎌田茂雄・河村孝照・中尾良信・福田亮成・吉元信行『大藏經全解説大事典』（1998年、雄山閣出版）所収の「主要著者・訳者解説」（848-864頁）による。また、著述年についても同書の本編＜大正新脩大藏經全典籍解説＞第33巻経疏部1～第44巻論疏部5の「解説」（473-539頁）に出ているものについては、それに従った。
- (73) 『大正藏』37巻、387頁、下段。
- (74) 同上、623頁、中段。
- (75) 同上、106頁、上段。
- (76) 同上、179頁、下段。

- ⑦⑦ 同上、192 頁、上段。
- ⑦⑧ 同上、306 頁、下段。
- ⑦⑨ 同上、265 頁、上段。
- ⑧⑩ 拙稿『『阿弥陀経』における「七重欄楯・七重羅網・七重行樹」について』
（『同朋仏教』第 38 号、2002 年、裏 20 頁）参照。
- ⑧⑪ 『大正蔵』41 卷、186 頁、上一中段。
- ⑧⑫ 同上、879 頁、下段。
- ⑧⑬ 『大正蔵』38 卷、289 頁、下段。
- ⑧⑭ 『大正蔵』43 卷、16 頁、下段。
- ⑧⑮ 『大正蔵』37 卷、320 頁、上段。
- ⑧⑯ 同上、339 頁、中段。
- ⑧⑰ 『大正蔵』35 卷、470 頁、上段。
- ⑧⑱ 『大正蔵』39 卷、260 頁、中段。
- ⑧⑲ 同上、1033 頁、下段。
- ⑧⑳ 『大正蔵』35 卷、938 頁、下段。
- ⑨① 『大正蔵』37 卷、354 頁、中段。
- ⑨② 同上、294 頁、上段。
- ⑨③ 同上、368 頁、上段。